

狂愛或いは純愛

黒とかけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは……ありえたかもしれない、ありゆるかもしれない。

主人公と彼女達の行く末を……

目次

ヤンデレ千聖は……………	1
恋は泡沫と消える	13
大切なもの	20
おまじない	25
妹は……………	32

ヤンデレ千聖は……………

「なあ、ほんとに俺まで着いていく必要あんのか？」

「ええ、貴方は私のマネージャーなのだから来て当然でしょ？」

「マネージャーも何も幼馴染だからってこき使うの誰だよ……………」

「さあ？誰かしらね」

はあ、彼女は白鷺千聖と言って世間では知らない人は居ないと思えるくらい有名な女優だ。一役演じればファンが増え、バラエティに出れば視聴率が上がると言った程の有名さだ。しかし、テレビでは皮を被っている。ひとたびテレビから外れれば幼馴染の俺をこき使ってくるんだから、こんな姿を世間に見せてやりたいくらいだ。

「何か変な事考えてなかった？しらたかゆうせい白鷹遊屋くん？」

「いや、まったく考えてなかったよ」

ほら、読心術まで習得してやがる。芸能界で社交辞令の為にでも鍛えてんのか？コイツは

「私はただ、P a s t e l ? P a l e t t e s の打ち合わせがあるから、その雑用をお願いって頼んだだけじゃない。それに、無理に来なくて良かったって良いのよ？」

「どうせ、来なかつたら家にまで乗り込んでくるんだろ？」

「あら？よくわかつてるじゃない」

そりゃわかるわ！この前だってそうだったからな、そして連れていく理由もあの口実を作る為だつてこともな。

「さあ、おしやべりはここら辺にして早く行きましょ？」

「はいはい……………」

正直帰りたい。しかし、帰つても俺に逃げ場なんて無いのかもなあ……………

そして、打ち合わせの場所であるC i R C L Eに着いた。今からでも良いから退却したい。帰らせて、帰ろう……………

「どこに行くのかな？ゆ・う・せ・いくん」

無理でした。

「いらつしやうい、千聖ちゃん。他のみんなはもう来てるから」

「ありがとうございます。まりなさん」

「頑張つてね。遊屋くんもね」

「はい……………」

頑張るって……逃げ場所無いし出来るのであれば帰りたい。

「ほら、早くみんなが待つてるんだから」

そう言われ、逃げる事も出来ずに着いていくんだからヘタレだよなあ

「あ、千聖ちゃん。みんな揃ってるよ」

「それに、遊星くん！今日はよろしくね」

「今日はよろしく」

挨拶をしてくれたのはピンク色の髪をツイントールに縛りしている丸山彩ちゃんである。甘い香りがして、それに優しい。千聖とはえらい違いなんだよなあ彼女になつて欲しい。

「お兄さんも来てくれたんですね！」

次は若宮イヴちゃん。フィンランド人と日本人のハーフであり日本の文化に憧れていて、漫画とかドラマの影響を受けてすぎている。『お兄さん』って呼ぶのだって、『日本人は親しい歳上の男性にはお兄ちゃんって呼ぶのが当たり前だと聞きました！』って言われたんだもん。さすがに『お兄ちゃん』は色々な意味でキツかったから『お兄さん』に直させたんだけどさ。

「うん。イヴちゃんもよろしく」

挨拶をしていた所で、こちらに向かってくる足音が聞こえた。本能的には『避ける!』と言っている様にも思えたが、このタイミングで走ってくるのは彼女しか居ない。ここで、避けて怪我でもしてしまつたら俺の身に何が起こるからわからない。だからこそ、受け止める体勢に切り替える。

「遊く~~~~ん!!」

と、飛びかかってくる。そこでしつかりと受け止める予定だったのだが、受けきれず倒れてしまった。

「会いたかったよ〜遊くん!」

「よう、日菜さんや。元氣そうじゃないか」

元氣すぎて受け止められなかった。抱き着かれるのは、後々で面倒な事にはなるのだろうが怪我されたら危ないからね。自己犠牲つてやつだよ（カツコつけてる訳では無いからな）

「さん付けじゃなくて、ちゃん付けにしてよ!」

「うん……日菜ちゃん」

「うん!」

笑顔も可愛いんだよね。癒されるよ……あの幼馴染は笑顔でも黒い笑顔だから怖い

んだよ……うん、怖い

「あと、日菜ちゃん。そろそろ、この体勢も問題がありはしないか？」

今の体勢は、俺が下敷きでその上に日菜がいる。しかも、腹の上だ。状況的にはギリギリセーフに近いアウトだ。千聖がいるなら尚さらヤバイ。後で死ぬ。

「私は、遊くんとなら勘違いされても良いんだよ？」

「俺が耐えきれない」

主に千聖からの重圧と日菜推しのファンからの威圧に

「そうよ、日菜ちゃん。遊星も困ってるしどいてあげて？」

「ええ、良いじゃん。千聖ちゃんは幼馴染だからいつでも出来るし、こっちの方がるんってくるし」

これじゃあ、どかれそうもないし少し力を入れてつと

「キヤツ」

起き上がる。そうすると、日菜は滑り落ちて俺は立ち上がれる。これこそ完璧な作戦、我ながら冴えてるぜ。

「うう、遊くんは傷ものにされちゃった」

「紛らわしく言うんじゃない。ほら、擦りむいたなら絆創膏やるから」

親から緊急時の為にも絆創膏くらいは財布に入れとけて言われてるから常に持つ

ている。

「遊くんからの、絆創膏くるるるんってきたよ！」

「私の遊星だつて言うのにな」

日菜独特のるんつとかるるるんって感じが未だにわからないよ。乙女心は複雑怪奇とでも言うべきなのかねえ千聖も含めて。

「何やら賑やかだと思えば、白鷹先輩が来てたんですね」

「うん。今日はよろしくね、麻弥ちゃん」

彼女はスタジオミュージシャンだったのだが、代役として入っていたらいつの間にかそのままメンバーになっていたのだ。機材の調整などは彼女無しでは回りきらないだろう。まあ、俺も機械は得意だからそこら辺は手伝ったりしている。

「そうだ、白鷹先輩に聞きたいことがあります」

「どうした？」

「ケーブルについてなんですけど、見てもらった方が早いかも知れません」

ケーブルがイカれたりしたのかな？音響機器はあまり得意じゃないから、頼りにされすぎるのも駄目なんだけどね。

「これなんですけど」

見たところ外傷は無いし、断線とかだろう

「これなら、中で断線してるだけなんじゃ？」

「それも思ってたんですけど、一応繋がりはするんで何処がおかしいのか……」

繋がりはするのなら、接触部か？微妙に汚れが溜まつてるようにも見えなくも無い

「なあ、麻弥ちゃん。何か細かい綿棒とか無いか？」

「ありますけど……」

そして渡された綿棒を使って軽く拭いてみる。心無しか取れた気もするけど、まあダメだろうな

「凄いですよ！ちゃんと繋がったツス」

「Reality?」

それだけで繋がるとか、ありえないよな。そんな所を麻弥ちゃんが見落とす訳ないし

「ホントつすよ」

「思ってた通りだよ（マグレなんて言えないよな）」

「さすが、白鷹先輩です！」

「私の分からない事ばかり話して……」

「何か言ったか？千聖」

「ううん。何も言っていないわ」

何か言ってたような気もするけど気のせいって事か……

「ほら、今日はPastel?? Palettesの打ち合わせするんだろ？」

「うん、そうだよね」

「じゃあ、次のライブについてなんだけど……………」

それからは順調に打ち合わせは進んだ。途中で日菜が飽きたと言って参加しようとしなかったが、俺が説得するとすぐに参加したのだが、俺の隣に座るって事が条件だった為、打ち合わせ中ずっと視線が痛かった。特に千聖からのが……………後が怖いんだよ。

「今日はありがとうございました」

「ううん。遊星くんのお陰で助かった事もあったし、また一緒に話そうね！」

「うん」

彩ちゃんはその純粹さが痛い。その優しさが俺に牙を向くんだよ……………泣ける

「じゃあ、今日はお疲れ様でした」

「私も帰るとするわ。行きましょ、遊星」

「はいはい……………」

そして、他の皆が見えなくなるくらい離れた時

「何で、私がいるのに他の女とイチャついてるのかしら？」

「あれは不可抗力ってやつだろ？」

とくに日菜の事件は不可抗力だ。俺は悪くねえ

「関係ないわ。貴方が避けていけば起きなかつたもの」

「避けて怪我でもしたら悪いだろ？」

フアンにバレたらたじや済まない。

「そんな人達が何人来ようと私がいれば、そのフアンの人達が悪者になって遊星は安全なのよ？それに、私以外の女なんて怪我したって私達には関係ないじゃない」

「同じバンドのメンバーだろ？」

「あのバンドは私が活躍する為の段階に過ぎないの。もつと私が活躍してお金が貯まられば遊星とずつと2人で暮らしていけるのよ？幸せでしょ？」

やつぱり、最近の千聖には慣れない。昔はもつと純粹だったのにさ。

「だって遊星が約束してくれたじゃないの。『お前は俺が護つてやる』って」

「あれは、その場の流れって言うかなんと言うか」

「少し子役をやってるって理由でいじめられてた私を助けてくれたのは遊星だけだっ

た。他の子は自分がいじめられるのが怖いからって助けてくれなかった」

確かに、あのいじめっ子は気が強いし絡まれたらしつこいからなあ。あの頃の千聖が懐かしいよ。

「だからね、今度は私が遊星を救うって思ったの。受験や就職なんてめんどくさい事はしないで、私と一緒に暮らすだけで良いのよ」

「就職しないで、ヒモになると?」

「そういう事ね」

最高じゃん。働かなくて女の子に養って貰う。俺は専業主夫になるだけ……………

「ヒモってダメな男じゃん」

「私は良いと思うわよ?」

「……………考えさせてくれ」

……………まで話していたら家の前まで着いていた。

「また、明日な」

「ええ、また明日」

そして、家に入ろうとドアを開けた瞬間背中を押された。

「つ!何が」

見えたのは夕焼けで輝く金色の髪だった。

「油断したわね」

「何を……………するんだ！」

「今日、何回他の女に抱きつかれたり、話をしたりした？」

メンバー全員と話して、日菜に押し倒されて……………ヤバイヤバイ

「たくさんしてたわよね？」

「……………はい」

いやね、貴方が打ち合わせに連れて行かなければ話しませんからね？連れていく理由が襲う口実を作る為だって知ってるんだからな

「言い訳はそれだけ？」

「なんで、わかつたんや！」

「遊星が考えている事なんて私が分からないわけ無いじゃない」

ええ怖い

「今日は遊星の両親も帰って来ないんでしょ」

「だから、何で知ってるの？」

「私が遊星の事で知らない事はないの。どんな事が好きなのかもね…」

これは、本格的にヤバイぞ。今までより本当にヤバイ

「夜は長いんだし、愛し合いましょ？他の女の匂いを消して私色に染めさせてアゲルか

ら……………」

逃げようにも抑えられて動かない。本当に女子なのか怪しいくらいだ。

「やっぱり遊星はいい匂いがする。でも、他の女の匂いがするせいでダメになる

……………」

「一緒にお風呂に入って、愛し合って、私達だけの世界を作りましょう？」

確かに俺だつて1度は逃げようとした。確か何も言わずに2、3日隠れた事があつた。その時が酷かつた。髪の毛はボサボサで肌は荒れ、まるで物に当たつていたかのようになつた。部屋は乱雑になつていた。そんな所に俺が顔を出したら、そのまま離すまいと抱きついて離れなかつた。それから、どこに行くにも着いてきていた。仕事で忙しい時はいなかつたがな。ただ、俺が隠れた後に千聖がどうなるのか怖くて逃げれていない……………簡単な言うただ、

俺は千聖から逃げれない。

恋は泡沫と消える

『私……貴方の事が……』

テレビで恋愛ドラマを眺めていた。特にドラマが好きと言う訳では無いのだが、液晶に映る女優

——白鷺千聖を見ていたと言う方が正しいのかもしれない。

今見ているのは最近、流行りの恋愛ドラマだ。最近のは、イケメンだ美人だと演技よく見た目を重視してる気がして見ようとしてはいなかったのだが、見ざるを得ない状況になった。

「テレビで見ると、可愛いんだけどなあ」

実は俺は白鷺千聖と恋人である。いや、別に痛い奴じゃないよ、幼馴染って事もあつたし、まさか告白して受けてくれるなんて思ってもなかったから。テレビだとお淑やかな女性って出てるけどあれ全て演技だ。俺をパシリに使うくらい本当はヤバイ。今ドラマ見てるのも、『私が出ているドラマは全部見て感想言え』って半ば押し付けられてるし……いやね、確かに可愛い。美人で、スタイルは………スタイルが良い………
はず

これ以上言ったらバレた時に何をされるかわからないからやめておこう。

「俺は何もない、男子高校生なだけけどねえ。これも神のお導きと言うことですか」

柄にも無いことを言っている

「あら？ 貴方が神を信じるなんて意外ね」

後ろから声を掛けられる。一応言っておこう、ここは俺の部屋でしかも2階だ。玄関の鍵も閉めてあったし、開いているのはトイレの小さい窓くらいだ。家には誰もいない。父さんは仕事だし、母さんは買い物、妹は友達とショッピング……さあ？ 誰だ？

……………千聖だ

「やあ、千聖さん。今日もご機嫌麗しゆう」

「聞こえなかったからもう一度お願い」

絶対に聞こえてた。俺の口が滑った時は絶対に見てくる目だもん

「ご機嫌麗しゆう、千聖さん」

「前に番組で知り合った腕のいい医師がいるのだけれど……………」

「ふざけてすいませんでしたあああ！」

「わかればいいのよ。それより、来週の土曜日にデートでも行かない？」

千聖からデートのお誘いとは珍しい。たまには恋人っぽい事もしたいしな

「OK、デートはいつも通りの行き当たりばったりって感じかな？」

「そうね、ちゃんと空けておいてね」

「おうともよ」

さてと、久しぶりだし少しくらい彼氏らしいところを見せたいものだ。自分がバイトの俺より稼いでるからと奢るとかカツコイイところ見せられないし、別に奢るのがカツコイイ訳じゃないけど………気分的にだ！

「これから私は打ち合わせがあるから………来週の土曜日デートよろしくね」

「わかってるよ。打ち合わせ頑張れよ」

そうやって軽く話す。別に冷めているという事じゃない………はずさ。千聖は仕事事が忙しいから昔みたいと一緒にいる時間が減っただけだから、その分今なら濃い時間も………出来たことないんだよなあ……もう少しデート計画も練った方が良いのかなあ、考えても終わらないよな。さてと、デートに行くんだし残り時間は1週間。少しでも身だしなみでも整える時間はある。

「デートの成功を目指して！頑張るぞ！」

「え？デートは無しになった!？」

デートを翌日に控えた金曜日の午後、千聖から1本の電話が入った。

『ええ……急な仕事が入っちゃって、行けなくなつたの。オフア一元が大手で断るのも難しいし……ごめんなさい……』

「いや……その仕事は千聖の将来にも関わりそうだしな、デートはまた次の機会だ。仕事頑張れよ」

『この埋め合わせは必ずするわ』

「へっ律儀なこつたあ。それよりその分仕事に力入れて、自分の為にもしていけよ」

『ありがとう。そんな貴方が好きよ』

「ば……ばっかじゃねえの!?!いきなり言うなよ照れるだろうが」

『ふふ、からかうのは楽しいわね』

「どうも」

『白鷺さん。そろそろお願いします』

『ごめんなさい。そろそろ切るわね』

「おうっ」

電話が切れてからは無音の時間が続いた。久しぶりのデートだと思ってたから、新しい服も買ったし美容室にも行ったんだけどなあ……無駄って訳じゃ無いけど、なんとも

なあ。明日はバイト入れてないし何するか、適当に街でも歩くか

そして、土曜日は来た。別に根に持つてる訳ではない、仕事が入る事なんて前からだし仕方の無い事だと割り切っても中々複雑なものだ。そうだ、ゲームソフトでも久しぶりに買って遊ぶか

「いっや〜久しぶりに買いに来たけど種類増えてんなあ」

前に来た時には無かったソフトが多く売られていた。若干ゲームソフトコーナーが広くなった様に思える。

「あ、これは。買おう買おうと思ってたけど忘れてたハンティングゲームじゃん」

このゲームは何年も前から売ってるシリーズ物のハンティングゲーム。モンスターを狩っていくゲームで、最新作だとグラフィックがかなり上がっていたから気になっていたけど、お金が無くて諦めていた。しかし、今回はデートの為にバイト代を残してあつたから余裕で買える。

「よし、久しぶりにやるか」

と、手に取りレジへ向かう途中でふと、最新型のテレビに目がいった。そこに出ていたのは

『あの女優！白鷺千聖の熱愛!?!』

そう書かれていた。俺達が付き合っていることがバレたと思ったが、そこに映し出されていたのは全くの別ものだった。そして、コメントーターは話し出す

『あの白鷺千聖さんが、今流行りの俳優、坂本浩一さんと熱愛とは驚きですね』

『同じ高校生での女優、俳優ですし何かの関わりがあったのでしょうか』

『昨晚、2人が同じホテルに入っていくとの情報がありますし、真実ですかねえ』

と、千聖とその俳優がホテルに入っていく写真が出ていた。

何かの間違いだと信じたかった。いや、間違いだと思いきや千聖に電話を掛けた
……………だが、その電話は真実を語っていた

『ただいま電話に出る事が出来ません——』

ゲームを買う気力を失い、棚に戻した後俺は走り出した。ひたすら向かう宛もなく走った。

「ああ、何をしてるんだか。なに、結局俺はただの一般人。アイツは俺らとは違う人間って事だよ。短い間でも付き合えた事が幸せだったって事か……………俺がいる意味ってなんなんだろうな」

そして、俺はこの街から去った。街を歩くだけでも過去を思いだし、辛くなるだけだ

と思ったからだ。

大切なもの

私が次のドラマの打ち合わせを終わらせる頃には、どこのテレビ局も同じ報道をして
いた。

『白鷺千聖・熱愛!』

どこもその話題を話していた。デマなのだが、その写真が丁度俳優の坂本浩一と一緒にホテルに入る時だったのが悪運だった。しかし、その写真は逢瀬でもなんでも無く、前回のドラマの打ち上げパーティで偶然会い一緒に入っただけなので、それが知られれば自然に静まっていくと思っただが、千聖には気がかりがあつた。それは、彼の事だった。自分からデートに誘つたのに、仕事で行けなくなり、さらには浮気の様な形になつてしまつたからだ。

子どもの頃から、子役として生きてきた。何をするのも世間の目と言うものがあり自由になる事が少なかつた。近寄つて来る人は皆、子役だから近づこうとしてくる。だが、彼は少し違つた。何と言うか、何も考えていないように思えた。純粹に私を個人として見てくれるような感じがしてその頃からの付き合ひだった。年齢が上がる事に、

下心で近づこうとしてくる人が増えてきていた。子どもの時に話していた人達も、私に人気が出たと知ると離れていく人や自分も話題になろうと近づいてくる人しかいなくなっていた。彼はそんな時に、自分から告白してきた。

『どうか！付き合ってくれないでしょうか！』

今思い出すだけでも、面白かった。だけど、その時には芸能界にいたから、表向きでは付き合えず隠れて付き合う事で受けていた。なんで、告白を断らなかつたのかは本当に信じてみたかつたから……そして、彼は本当に純粹だった。だからこそ、この事件で何かが変わってしまう気がした。まだ、打ち合わせに感して話したい事があつたらしいが体調が悪いと言い、彼の住んでいるアパートに向かつた。けれど、彼の部屋には何も残っていないかつた。前までは、簡単に付き合つておけば良いと思つていた……大切なものは失つてから大切だと気付く

「(トク)が新しい家か……」

住んでいた場所から、かなり離れた場所に住むことにした。父さんの実家のある場所
で、昔住んでいたらしいけど住まなくなり、売るに売るタイミングが無く残つていた所
に住むことになった。ここは、田舎と言うのがピッタリな場所でここなら、辛い事も思

い出さず暮らしていけると思った。

いつも丁寧に手入れのされていた髪の毛はボサボサになり、肌もあれていた。

「どうしよう……どうしよう……」

と、ひたすら考えていた。せつかく信用出来る人と……彼も同じ気持ちだったのかも
しれない。こんな私と付き合つて、恋人なのらしい事もできず、なにがあつても私優
先で……それで、変わらずに私と居てくれて……残された道は1つしかなかった。

こちらに移り住んでから、数日の時が過ぎた。有意義な時間を過ごせたように思つて
いたのに心に何かひっかかるものがあつた。千聖の事が忘れられていなかった。いく
ら忘れようとしても、告白した日のことを思い出してしまう。なにか忘れるきっかけを
得るために、あの後千聖がどうなったのか調べてみることにした。あの日以来、電話も
トークも全て消していたから何もしていなかった。だから、調べてみる事にしたのだ
が……自分のやった事の重大さを思い知つた。

『白鷺千聖。驚愕の芸能界引退』

『熱愛はデマだった!』

など、様々なネットニュースが飛び交っていた。その中でも一つのサイトを見ることにした

『女優、白鷺千聖が芸能界引退を発表した。子役の頃から芸能界で活躍していたが、最近では熱愛報道など、デマによつて、精神的・身体的に疲れていたのではないか。つまり、この引退はマスコミに原因がある——』

そこで文章を読み、知つた。自分があまりにも勝手な事をしていたと…大変な時に傍にいてやれなかったと…と考へている時にインターホンが軽快な音をたてながら響いた。千聖の事も考へなくてはいけないが、今は訪ねてきた人に出なければいけないと思ひ、玄関に向かつた。

「はい。今出ます」

と、玄関を開け

「どちら様でしょう…」

目の前にはいるはずのない人が立っていた。

「何で……」

千聖——白鷺千聖が立っていたからだ

「みつけた」

体が動かなかった。その間に、徐々に詰め寄られ、尻もちを着いていた。

「これから、ずっと一緒だからね。何が起きても、何があっても」

そのまま、手を首にかけれ……………

おまじない

とある練習室で秘密の女子会が開かれていた。

「お兄ちゃんといチャイチャしたい」

それは今井リサの恋愛相談が始まりだった。

「皆さ、ちよつと相談があるんだよね」

「どうしたの？リサ」

次のライブに向けた練習の休憩中にリサが言った。

「友希那なら知つてると思うんだけど、私好きな人がいるんだよね。どうやったらイチャイチャ出来るかな〜って相談」

「ええ！リサ姉に好きな人!？」

「好きな人ですか……」

「今井さんの……好きな人……」

どんなにクールな Rose lia と言えど、年齢はお年頃の乙女。こんな話題に興味が無いわけではなかった。

「まだ、諦めてなかったのね」

「あはは、やっぱり諦めるのは無理だった」

「諦めるってどういう事なの？リサ姉」

と、あこが聞いてくる。諦める理由があるのかと気になったからだ。

「えっとね、相談しといて言いくいって言うのも変なんだけど、アタシの好きな人ってお兄ちゃんなんだ」

「リサ姉にお兄ちゃん！」

「アタシの両親って、仕事人で家を開けることばかりでさ、お兄ちゃんが親代わりだったんだ」

「そうだったんだ」

「でも、兄妹と言うと……」

「そうなんだよね。紗夜みたいに姉妹なら良かったのかもしれないけど」

「私は、別にそんなのじゃありません」

誤魔化してはいるが、紗夜の思っている事をリサは少しだがわかっていた。同じ様に兄妹が好きな気持ちがあると。

「それで、何かある度にお兄ちゃんに助けってもらったりしてたら好きになってたんだよね、お兄ちゃんのこと」

「あこもお姉ちゃんの事好きだからわかるよ、好きな気持ち」

「うーん、あこの好きとは少しだけ違うかな。兄妹じゃなくて異性として好きになっちゃったんだ」

「そうなんだ。ところでさ、リサ姉のお兄ちゃんってどんな人？」

「確かに、それは気になります」

「今井さんの、お兄ちゃん……」

「え？みんな、いつも会ってるじゃん」

「「え？」」

「いつも練習のセッティング手伝ってくれてるのがお兄ちゃんだよ」

「あの、いつも手伝ってくれる？」

「あの人がですか」

練習のセッティングや、機材の用意、ライブの裏方など様々な事をしてくれている人がいた。

「みんな、驚いたでしょ」

「あの人がリサ姉のお兄ちゃんか」

「最近、日菜が話をするようになって」

「確かに、お姉ちゃんも『あの人が兄貴だったらなく』って言ってたよ」

「つまり、リサ姉のお兄ちゃんの周りにライバルが多いってこと？」

「うん」

「じゃあさ、リサ姉なりのアプローチしてみようよ」

「やってはいるんだけどねえ……やっぱり妹として見られてるんだよね。好きとは言ってくれるけど妹としてっばいし……」

「うーん」

それからは、良い案が出てこなかった。勉強を教えて貰いながらさり気なくアプローチや手作りお菓子、編みぐるみをプレゼントする等があったが、どれも決め手に欠けると思った。

「あの……今井さん」

ここで、あまり発言をしていなかった燐子がとある提案をした。

「燐子？」

「前に読んだ本に、あるものが載ってて……秘密のおまじないです……」

おまじないは一つのお願いごとの様なもの。例えば、手のひらに人を書いて飲むと落ち着くだとか、悪いものでいうと藁人形だとか、そういったものを総じておまじないと呼ぶ。

「燐子。教えて！」

「頑張ってください……」

燐子は本で読んだおまじないを教えた。それは、とても簡単な物で、自分の髪の毛を一本入れた編みぐるみを好きな人にプレゼントするというもの。

「ありがとう、燐子。今日から編んでみるよ」

そして、リサの恋愛相談が終わった。ふと時計を見てみると休憩時間を多く取ってしまつたらしく、部屋を開けなければならない時間に迫っていた。

「今日は、終わりのようね」

「ごめんね。アタシがこんな変に相談して練習出来なくなっちゃつて」

「練習も大切だけど、リサ姉の事も大切だから今日くらいは……」

言いかけたところで、紗夜の方を見る。いつもギターの練習に手を抜かない彼女が何か言うかと思つたからで

「考え事がある中で練習をするどこか抜けてしまいますし、早めに考え事を無くすことも大切なので今日くらいは」

「ありがとう、氷川さん」

「しかし、明日からの練習はしっかりとやっていたいただきます」

「うんっ」

「じゃあ、今日のところは終わりね」

と、友希那の一声で今日は解散となった。

「よっし、さっそく編みぐるみの準備しなくちゃ」

「確か、お兄ちゃんって何の動物が好きだったっけ？」

「お店で編みぐるみの毛糸を探しながら考えていた。」

「あつ、これって」

リサの目にとある編みぐるみが写った。それは有名ゲームのモンスターのセットだった。

「お兄ちゃんが好きだって言ってたゲームのだ。よく話してたのがこれ……だったよね」

リサが手に取ったのは、青色のモンスターの編みぐるみが写ったセットで、始まりの街周辺で出てくるモンスターだった。

「これなら、貰ってくれるよね」

好きなゲームもモンスターだし、もらって大切にしてくれると思えばレジへと持っていった。

「ふんふんふん」

鼻歌を歌いながら編みぐるみを作っていた。ほぼ完成していて、8割と言ったところだ。

「中にアタシの髪の毛を入れてっ」と

髪の毛を入れたとしても編みぐるみであるため外に飛び出ることにはなさそうだった。

「これを渡せば、お兄ちゃんはおアタシの物に……」

少しずつだが、リサの心の中も変わっていつていた。

「アタシだけのお兄ちゃん……」

あの時、燐子から教えて貰ったのはただのおまじないではなかった。前に読んだと言うのは、本物の呪術おまじないの本だったのだ。表ではおまじないとしかないと、今までの人も燐子もただのおまじないだと思っていた。しかし、本物は効果がある代わりにとある代償が必要だった。それは、込める想いが強ければ強いほど効果がある代わりには何かを失う。それを、知ってなければ取り返しがつかなくなるが、この時には既に手遅れだった。

妹は……………

それは、ある日突然訪れた。

「お前の妹っていつ見ても綺麗だよなあ」

「ああ。そりゃ、俺の妹だし、昔から可愛がってきたからな！でた番組やドラマ、映画のBDは全部持つてるから見たければ頼るといい」

「妹さんが出演してんだし、貰えるっただけだろ？」

「馬鹿野郎が！自分で買わなきゃダメだろうが。それで満足してたら、会社に金がいなくて、千聖を出して貰えなくなるだろうが！」

「俺が悪かったよ。お前のシスコンっぷりは昔からだからな」

「わかれば良いのだよ」

「今までに何度も聞いたことのあるセリフだ。俺の妹は白鷺千聖と言い、若いながら何本ものドラマや映画、バラエティなどに引つ張りだこの女優である。」

「なのにお前は平凡だよなあ」

「よしわかった。お前が後輩に告白して撃沈したことをクラス中でバラ撒いてやろう」

「これも何度も聞いたことあり、流していたが今回ばかりは癩に触れやがった。」

「ちよつ、おま、なんで知って」

「俺の情報網甘く見るなよ」

「ラーメン三郎で昼飯を奢ろう」

「よし契約成立」

と、まあこんな感じにふざけているのは悪友の名を中村武と言う。特徴は馬鹿といふことくらいしかない。

「だったら昼飯は奢りだし、トッピング盛り盛りするか」

「お前、覚えとけよ」

「ほう、ならばバラ撒いてやろう。貴様が後輩の宇田川と――」

「それ以上言うなアア！」

「わかればいいんだよ。武くん」

「くそ……まあ、決まったもんは仕方がない。それより、今日は午前中だけ学校で何するんだっけ？」

「確か、学校からメールがきてて………すまん。スマホ忘れた」

「マジかよ……」

「すまん、家に戻って撮ってくるから先に学校行っててくれや」

「あいよ、遅刻はすんなよ」

「わかってるよ」

さっさと取ってこないと遅刻ギリギリやなと思いつつ、歩いてきた道を走って戻って行った。

息を荒らげつつ家に戻ってこれた。時間を見る限り学校へは走り続けなくても遅刻はなさそうだった。この時間は誰もいないから、鍵を使ったら鍵が閉まってしまった。という事は鍵が空いていたことになる。閉め忘れは誰だ？と思いつつ玄関を開けると

「千聖……………」

玄関を開けたところに千聖がたっていた。制服に着替えているところから今から登校する所だろう

「すまん、スマホ忘れて取りに来ただけだから、サボりとかじゃないからな」

「……………スマホってこれ？」

千聖の手にあったのは間違いなく俺のスマホだった

「持ってきてくれたのか、ありが」

「1つ、兄さんに聞きたいことがあるの」

いつもと少し雰囲気が違うように思えた。これも演技の1つなのか、練習なのか

「なんだ？」

「なんで、スマホの中に彩ちゃんの写真ばかり入ってるの？」

「あつ……………」

今、1番見られてはいけないものを見られてしまった。

「兄さん。私言つたよね。私以外の女の子を見ないでつて」

昔から口癖の様に言っている言葉だ。確かに、お兄ちゃんっ子にしようとかあの手この手と使つた事はあるけど、ここまでするとは思つて無かつたんだよ。

「部屋にある本も処分した。近づく女も追い払つた。なのに何で私だけを見てくれないの！むかしは何をするのにも私を見ていてくれたのに、なのに何で！」

いや、ブラコンにしようとは思つてたけど、ここまで酷くなるとは思ひもしなかつた

「彩の写真が多いのはフォームとかを教えて欲しいって相談されてさ、それで見るために」

これは由々しき事態だ。亜空間物質転送装置で逃げたいくらいに由々しき事態だ。

「彩って呼び捨てにするほど仲が良いんだ……」

「ええつと……………」

「兄さんが可愛いって言うてくれたからオシヤレも考えるようにした、兄さんが好きって言うから髪の毛のケアも毎日丁寧にした、兄さんが褒めてくれるから辛い女優も続けてくれた……何をするのに兄さんが居てくれたからやってこれたのに……」

「これには理由があつて、千聖も聞けば」

「もう……無理なの……こうするしか」

最後に見たのは迫り来る刃物だった——

『本日の午前8時頃、高校生2人の行方不明事件が発生しました。行方不明になつてるのは女優の白鷺千聖さんと、その兄の白鷺遊一さんと見られ、玄関に血痕などが残つていたことから警察は誘拐事件と見て捜査を進めています——』

「今からでも遅くは無い————ってセリフはダメですからね、兄さん」

「さつさと戻つて、結婚しよう千聖って言つたらどうする？」

「兄さんと結婚したい。けど、この国は許してくれない。だから、こうして」

「だからと言つて、監禁は無いさ。くつききたいなら家でも出来るだろうに」

「怖かつたの。兄さんを誰かに取られるのは。パスパレの皆と兄さんが会つた時は、誰

かが一目惚れでもしたらどうしようってずっと考えてた、そしたら彩ちゃんの写真が出てきて」

「それは、悪かったよ。ポーズの練習つてのは本当だ。秘密つて言われてはいたんだが『焦つてみんなの足を引つ張らないように立ちポーズとか歌つてる時に手が変にならないうように練習したい』つて相談受けてたつてだけだ」

「そう、だったんだ……………フフ、何だかそう聞くと彩ちゃんらしいな。勘違いしてた私がバカみたい」

「そういう事だ。今なら、ドツキリくらいで何とかなるだろうし」

「うん」

「さてと、帰るか……………」

と、思ったが上手く立てなかった。よくある、足が無くなつてるとかではない。あるのだが立てなかった。

「千聖……………何を」

「ここから逃げないようにつてアキレス腱を少し」

まだ、治る見込みはワンチャンあるから良いとして

「これから、治るまでどうするかなあ。それより、救急車やら呼ばないと……………これからりハビリ生活か」

「兄さんのお世話は全部、私がやるから」

「千聖……ここまで呼んで」

「今回は勘違いで済んだけど、次からは無いからね。兄さんは私だけ見てれば良いし、私だけ居ればいいの」